ISSN 2185-2413

仏教儀礼

本願寺仏教音楽・儀礼研究所 ニュースレター

特集：タイムスリップ大遠忌



2011.1 第13号

はじめまして、儀礼と申します

外見より中身？

現在の日本では、「私は外見重視です」というと、中身を軽視しているというふうに思われますね。ですが、本音をいえば、外見も大切という方も多いと思います。ではどうして、外見重視が敬遠されるのでしょう。中身を知る手掛かりにならないからでしょうか。あるいは、外見は虚飾にすぎないというのでしょうか。

外見が表わすもの

外見に対して中身を重視するようになったのは、実は、明治の近代化以降と言われています。それ以前の時代は身分制度が厳しかったので、髪型や服装、振る舞いや言葉遣いなど、外見的要素によって出自が分かるようになっていました。そして、その階層に応じた立ち居振る舞いや精神性（中身）が教育されたのです。

近代の遺物

西洋化を進めるなかで、近代日本は欧米の精神主義や哲学を学び、教育に導入しました。一方、江戸時代までの風俗習慣は「前近代的」として否定されました。このように近代化の過程で、古きものを過去の遺物として軽視することはよくあります。しかし、今や先進国と呼ばれる日本が、いつまでも近代志向のまま留まっていたとしたら、かえって問題があると思われませんか。

心遣いを形に

日本の古き良き習慣の一つである、“心遣い”を例に考えてみましょう。私が思うに、日本人は気持ちを形に表すのがとても上手な国民です。例えば、お歳暮やお中元など季節の挨拶、自宅にお邪魔する際の手土産、結婚や出産・入学のお祝いなど枚挙に暇が無いですね。また、頂いた方も、物に添えられた気持ちを汲んでお返しをします。

外国では、あまり親しくない者同士でプレゼントのやり取りをする習慣がありませんので、とても不思議がります。しかし、それがちょっとした心遣いの表現であり、コミュニケーション・ツールの一つと説明すると、たいていの方は「いい文化ですね」とおっしゃいます。

合理主義

少ないコスト・労力で、より多くの利益・生産を生む合理的な資本主義システムのお陰で、日本は先進国に仲間入りしました。

しかし、今、この合理性が経済や産業の枠を超えて、人間の思考にまで侵食しているように思えてなりません。皆さんも、日常生活の中で面倒なことや手間隙のかかることを、古い習慣として切り捨てていませんか。

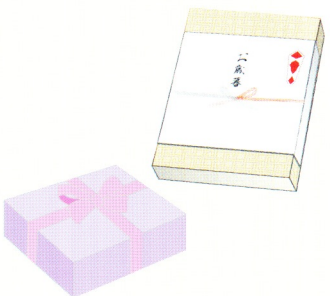
形にこめられた思い

形（カタ）にはそれなりの意味があります。季節の挨拶などは、たとえそれが葉書一通だったとしても、コミュニケーションを生み出します。また、旅行のお土産を頂いた時は、旅先で私を思い出してくれたことに嬉しくなります。このように、心遣いが形に表れたものは、頂いた者にとって嬉しいものですね。

しかし一方で、さまざまな形に添えられた思いを汲む感性がなければ、物としてしか見ることができません。そして、物の値段や価値で、逆に相手の気持ちを計ろうとするのです。

このことについて、次号では、仏事におきかえて考えてみたいと思います。

（常任研究員　多村至恩）



目　次

◆はじめまして、儀礼と申します　2頁
◆本願寺茶房（第３回）―― 荘厳の力〈後編〉　3頁
◆儀礼しています（第２回）― 宗派を超えた大遠忌法要　6頁
◆タイムスリップ大遠忌 ―― 江戸時代編　8頁
◆行ってきました“親鸞さまの道”　10頁
◆追悼　浅井成海先生　12頁
◆葬儀“あれこれ”　14頁
◆表紙写真の解説　16頁

対談

本願寺茶房

第3回

亭主 大村英昭が不定期に開く本願寺茶房。ここは、1日1客限定、しかもお気に入りの客人しか呼ばないという、ちょっと変わった処です。アカデミックな話を好む亭主が、最近関心をよせている≪儀礼≫について語りあう場として開きました。前号に引き続き、今日も天岸淨圓さん（行信教校講師）を客人として、話が盛り上がっているようです。

前号(11号)では、「安心門」と「起行門」の混同が、儀礼表現の意義をわからなくしているというお話でした。では、続きをご覧ください。

荘厳の力〈後編〉
―仏法との出遇い―

亭主 大村英昭
客人 天岸淨圓



〈人間の姿で拝みたい〉

天岸：例えば、仏さまにお仏飯をお供えするとか、親鸞聖人のご命日だからお精進させてもらおうというような発想は、儀礼が日常性の中で生きているからこそ出てくるのです。このように、日常性の中で“仏教者としての行動を起こす”ことを起行と呼びます。一方で、信を確立するときには、信者であったか、なかったかが問題となります。信者になるということは、すなわち、仏さまを受け入れることができるようになったということです。そして、その上で、仏さまとの日常的接触が成立するというわけです。そのときに、やはり仏さまを、人間は人間のお姿で拝みたい、人間は人間の言葉で聞かせていただきたい、また、人間の姿としてお礼もさせてもらいたい、だからこそ、お仏飯も上がっていただきたい、という感情が出るのではないでしょうか。

大村：おっしゃるとおりですね。つまりはご信心の中身を問いかける「安心門」とは別に、僕らの日常生活の中で、ご信心がどう表現されているのか……。生活世界そのものが、お念仏によって荘厳されていくというのも、そういう意味からなんでしょうね。

天岸：だいぶ以前、面白いことに親鸞会の方が来られましてね。お寺の本堂にお参りになられました。うちのご本尊は、お木像なんですね。そのお木像をご覧になって、「あんたのところは木像ですか。形像ですね。親鸞聖人はお名号でしょう」とおっしゃったんですよ。親鸞聖人は、「帰命尽十方無碍光如来」という名号を、ご本尊にされていましたからね。

大村：ほう、それで先生はどのようにお答えになられたのですか。

〈「親鸞会」の人に応える〉

天岸：「あんた、あれが名号に拝めなかったかね」と言いましたよ。お木像の阿弥陀さまのお姿を、お名号と拝めなかったのかという意味でね。それは、あなたに信心に培われた感覚がないだけのことです、と申しました。

大村：中身のおいわれから申せば、お姿のままで名号である、ということも言えるのですね。



天岸淨圓師

天岸：そうなのです。でも、逆に言ったら、お宮殿の中にお姿だからこそ収まっているのですよ。お宮殿の中で「南無阿弥陀仏」というお六字だったらアンバランスでしょう。それを考えてください。むしろ、館の付いたお宮殿に「南無阿弥陀仏」のお六字を掛けて、アンバランスでないという宗教感覚の方が、むしろアンバランスなのです。

大村：それこそ、理屈を超えた感性の世界なんですよね。

〈入仏式と御移徒〉

天岸：もっと一般的な話をしましょうか。今は「入仏式」という表現が、宗門で一般化しましたけどね、ごくごく普通の大阪の人たちは「お性根入れ」と言います。また、遷座法要とか動座法要は「御移徒」、もしくは「お性根抜き」という表現をしています。

それが是か非かということは別としまして、その表現には、入仏法要を勤めさせてもらうことによって、そこに仏さま中心の時間と空間が成立するのですよ、という思いが込められています。ただ（新しい）お仏壇が入られたから、おめでとうさんという意味ではなくて、今までは人間が主人であった家から、仏さまがご本尊である家に変わるのですよ、というような世界をつくり上げていくのが、私は、お参りとかお勤めといった“儀礼の力”ではないかと思うのです。

大村：儀礼の中で、感覚的に新しい世界を創り出すということですね。けじめみたいなものでしょうか。古い私が住んでいる世界とは別の世界になるという、つまり、み仏に照らされている新しい世界というものに移行するわけですね。その意味ではやはり、けじめというところで儀式、儀礼というものが極めて重要な意義を持つわけですよね。

いや、むしろ何もなしで、だらっと違う世界に移るということはあり得ないわけですから。何かそこにきちっとした、常とは違う姿勢で、常とは違う言葉を聞き、常とは違う経典を朗誦するということは、おいわれの中身を知るという以上に、儀礼表現として極めて重要なことだということですね。

〈弥陀・釈迦・十方の諸仏と共に〉

天岸：ええ。そこを、僧侶が理解しなければなりませんね。真宗儀礼には、常に如来さまがおみえになっていらっしゃるという、その緊張感を、お勤めをなさるご住職が、それをご自分の身に体験していくわけですよね。それができなかったら、法事にならないのです。

まあ、お経を読んでいただいているだけでも、意義は十分あるんですけれどもね。しかし、理想から言ったら、三奉請をおつとめして、いま私は、弥陀・釈迦・十方の諸仏と共に座らせていただいていますというような、いい意味の緊張感がそこに漂ってこないとならないと思うのです。ただ、現実は、そのような訓練が教学的にもなされていませんがね。

大村：そのようなことが、前回おっしゃった「法事とは、ドラマチックな儀礼表現」ということなのですね。





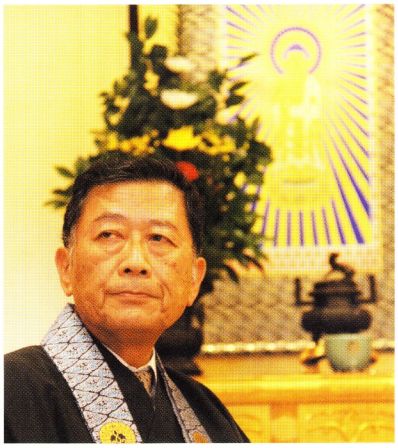
天岸淨圓（あまぎし じょうえん）

1949（昭和24）年、大阪府生まれ。龍谷大学文学部真宗学科卒業。本願寺派宗学院終了。行信教校研究科卒業。本願寺派輔教。本願寺派布教使。行信教校講師。浄土真宗本願寺派西光寺住職。著書『浄土真宗の行き方』（探究社）、『お彼岸と私』（本願寺出版社）、『蓮如上人のキーワード』（本願寺出版社）、『法事のドラマ』（浄土真宗本願寺派大阪教区）他多数。

亭主のほっと一息

荘厳の力（後編）はいかがだったでしょうか。「七・五・三のようなものでも、お寺でしてみたら意外に受けますよ」とおっしゃる天岸淨圓師。しかるに、僧侶方がそういうことを躊躇われるのは、要は「安心門」と「起行門」との混同に由来する“自力アレルギー”があるからでしょう、という点で天岸師と私の意見が完全に一致したのが前編の勘所でした。で、この後編では、これをさらに具体化し、お念仏が日常の生活世界を荘厳して下さる様子をつぶさに説明していただいたわけです。

「安心門」から申せば、弥陀・釈迦・十方の諸仏をお迎えする“三奉請”も、お宮殿の中のお姿を拝むことも、ましてやお仏飯をお供えするようなことも、すべて必要のないことなのかもしれません。でも日常生活の「起行門」においては、これらを抜きにした“お念仏”はあり得ません。ですから、「親鸞会」の、名号本尊でないと駄目だ式の主張に対して、「館の付いたお宮殿に六字名号を掛けてアンバランスでないという宗教感覚のほうが、むしろアンバランスなのです」と天岸師はおっしゃるわけです。「安心門」の非日常性に対する「起行門」の日常性。この難しい論点を実にわかりやすく説明して下さった天岸淨圓師でした。



大村英昭（おおむら えいしょう）

1942（昭和17）年、大阪府生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。社会学博士。大阪大学名誉教授・関西学院大学教授。浄土真宗本願寺派圓龍寺前住職。本願寺仏教音楽・儀礼研究所客員研究員。著書『臨床仏教学のすすめ』（世界思想社）他多数。

2010年度 研究スタッフ

所　長　小野　功龍（雅楽研究）

〔儀礼部門〕

常任研究員　多村　至恩（宗教社会学）
研究員　大田壮一郎（歴史学）
客員研究員　大村　英昭（宗教社会学）
　　杜多　隆信（勤式）
委託研究員　轡田　智文（勤式）
　　武山　晃隆（真宗学）
　　直林　不退（歴史学）
　　山田　雅教（歴史学）

（各五十音順）

事例紹介

儀礼しています

第2回

研究所では、僧侶やお寺の機能を活かした実践的な活動を調査しています。具体的な活動の紹介を通じ、さまざまな儀礼のあり方にふれていただきましょう。

宗派を超えた“大遠忌法要”

親鸞聖人と無動寺谷大乗院のご縁

若き日の親鸞聖人は、比叡山で20年間修行をされました。そのうち十数年を、無動寺谷大乗院（天台宗総本山延暦寺一山）で過ごされたと伝えられています。大乗院で「十二年籠山行」を行なっていた親鸞聖人は、ある日、不思議なお告げにより比叡山から出て、百日間、京都・六角堂にお参りされます。当時、夢告*1が得られることで有名だった六角堂は、人生の岐路に迷った人たちの参籠の場として賑わっていました。親鸞聖人も、修行の身ながら多くの煩悩を抱えるご自身に苦しまれていたのでしょう。

しかし、今も昔も「十二年籠山行」の間に、比叡山から下山することは許されません。なぜなら、下山は行の挫折を意味するからです。しかし、聖人は六角堂へと向かわれました。聖人の求道心が、この厳しい決断を支えたことは言うまでもありません。その熱心な聖人のお姿はのちに伝説となって、今も比叡山内に残っています（詳細は裏表紙参照）。

宗派を超えた僧侶の活動

親鸞聖人ご自作と言われる「蕎麦喰い木像」を本尊とする大乗院では、天台寺院であるにもかかわらず、80年以上前から報恩講法要がお勤めされており、



〈右〉
比叡山延暦寺無動寺谷大乗院住職　北嶺大行満光永圓道師

〈左〉
比叡山延暦寺一山南山坊住職（大乗院前住職）
北嶺大行満　光永覚道師



光澤寺 大遠忌法要の様子

天台僧侶と真宗僧侶がそれぞれ導師を勤めます。親鸞聖人をご縁として、宗派を超えた僧侶たちがかつての修行の地で報恩講法要をお勤めするのは、実に感慨深いものですね。このようなご縁を経て、天台宗・本願寺派・大谷派の僧侶たちによる大遠忌法要記念事業、「親鸞さまのお通りイン関西」が発足したのです。

聖人の足跡を辿る

「親鸞さまのお通りイン関西」は、パート1・2の2部構成で行なわれました。2009（平成21）年9月に開催されたパート1は、親鸞聖人ありし日のご苦労を追体験しようというコンセプトのもと、大乗院から六角堂までの約18キロの道のりを、親鸞聖人



天台宗・本願寺派・大谷派僧侶と世話人

＊1　夢の中に神仏が現れ、言葉で意志を告げること。親鸞聖人は、救世観音菩薩の夢告を得たと伝えられています。

をお慕いする僧俗約150名が辿りました。翌2010年5月より始まったパート2では、関西の真宗寺院7ヶ寺に、大乗院の蕎麦喰い木像が御下行しました。その様子を、本願寺派光澤寺の事例より紹介致しましょう。

蕎麦喰い木像の御下行@光澤寺（兵庫教区北摂組）

兵庫県三田市に位置する光澤寺（杉本光昭住職）は、「親鸞さまのお通りイン関西」事務局の真宗大谷派専称寺（西川義光住職）と以前より親交があったことから、この企画に賛同しました。また、この宗派を超えた僧侶の取り組みは、メディアでも大きく報道されました。ともすると、有名なお木像を迎えることが目的となりがちですが、杉本住職は親鸞聖人750回大遠忌法要のお勤めを重視し、法要の準備を始めたそうです。

杉本住職の思い

蕎麦喰い木像の御下行は、天台寺院と真宗寺院、双方の深い理解と協力がなければ成功しなかったでしょう。杉本住職は、比叡山の修行僧範宴（当時の親鸞聖人のお名前）から、浄土真宗を見ていこうとされました。すなわち、比叡山での厳しい修行があってこそ、浄土真宗が成立したということです。ですから、その当時のお姿であるお木像を大切にお迎えし、ご門徒・参拝者の皆さんと大遠忌法要を勤めたいと思われたのです。法要は、宗祖讃仰作法第三種（音楽法要）で行なわれ、住職みずから鉢や銅鑼を使って楽器を製作し、全ての音源を生演奏で再現されました。


杉本光昭住職


「蕎麦喰い木像」を乗せた輿

生きたお聖人様のお立ち寄り

法要の準備をする中で、杉本住職の気持ちに変化があったそうです。最初は、門信徒方にとってご勝縁になるよう、また、ご法中方に失礼の無いようにと意識を向けられていました。しかし、法要が終わって感じたことは、参拝に来る皆さんのためにと一所懸命していたことが、実は、自分自身が法要のご縁に遇わせていただくという、阿弥陀様による先手のお手回しであったというのです。「法要中、親鸞聖人様と同じ空間で無言の会話ができたように感じた」という杉本住職の言葉こそ、その証ではないでしょうか。住職の思いは良い緊張感となって堂内を包み、まるで生きた聖人がお立ち寄りになられたかのような雰囲気を醸し出していました。


大乗院御本尊「蕎麦喰い木像」
（撮影：和田義男）

ワンポイント儀礼

今回は、浄土真宗で最大規模を誇る大遠忌法要が、宗派を越えたご縁を結んだ事例を紹介いたしました。一連の記念法要に出勤・参拝された方は、様々な感動をこの法要から味われたことでしょう。

皆さんも、誰かのために一所懸命頑張っているうちに自分自身が夢中になり、やがて、その行為が自分自身に必要だったんだと、気付かされた経験があると思います。杉本住職の心の変化こそ、如来様の働きと言えるのではないでしょうか。法要儀式には、周到な準備が不可欠です。それは、如来様や全ての参拝者に失礼のないよう、そしてご勝縁になることを願うからなのですが、実は、この私がご縁を結ぶ準備でもあるのです。情けは人のためならず――とよく言いますが、儀礼も人のためならず――ですね。

調査協力：比叡山延暦寺無動寺谷大乗院・真宗大谷派専称寺・本願寺派光澤寺

（常任研究員　多村至恩）

特集

タイムスリップ大遠忌

江戸時代編

大遠忌法要は、長い歴史と伝統に支えられてきました。前号(11号)の650回忌編に引き続き、今回は江戸時代の大遠忌法要を取り上げ、その意義に触れさせていただきましょう。

江戸時代の大遠忌

「ごおんき」・「ごえんき」

江戸時代に入って最初の大遠忌は1611（慶長16）年の350回忌でした。1602（慶長７）年に分派した西本願寺と東本願寺は、まもなく大遠忌を迎えます。東本願寺での法要の様子は記録が乏しく詳しくわかりませんが、分派して最初の大遠忌ですから、お互いを意識して厳修されたことでしょう。

以後、ともに50年ごとに大遠忌法要をお勤めしながら、東西それぞれの特色を出していきます。本願寺派では「ごおんき」、大谷派では「ごえんき」と呼ぶように、法要の呼び方ひとつを取っても、はっきりと東西の違いがあらわれています。

大遠忌と記念事業

このたびの750回大遠忌法要に伴い、御影堂の大修復をはじめ、様々な記念事業が行われています。遠忌に合わせた事業は、早く400回大遠忌の大谷本廟整備があります。また、500回大遠忌では阿弥陀堂の再建、550回大遠忌では御影堂の修復が行われました。その折々の経費は相当な額に上りましたが、全国門徒の懇志や奉仕によって支えられてきました。

50年という遠忌の間隔は、仏教的意義付けは難しいものですが、変化する社会に〈呼応〉するみ教えの在り方を考え、宗門の維持・発展を促す契機として、誠に有り難いご勝縁と言えましょう。

江戸時代の大遠忌		
回忌	宗主	年号
350	准如	慶長16（1611）年
400	良如	寛文元（1661）年
450	寂如	正徳元（1711）年
500	法如	宝暦11（1761）年
550	本如	文化８（1811）年
600	広如	文久元（1861）年

蓮如上人遠忌

私たちの記憶に新しい遠忌法要といえば、1998（平成10）年の蓮如上人500回遠忌法要でしょう。1748（寛延元）年の250回遠忌の頃から、蓮如上人の遠忌は、歴代宗主のなかで唯一、大遠忌に准じた規模で50年毎に行われるようになりました。同じ年には、上人ゆかりの越前国吉崎に吉崎別院が落成しており、この頃から宗門のなかで上人の存在感が増していった様子がうかがえます。

遠忌の時代

法然聖人の場合

浄土真宗にご縁の深い法然聖人は、親鸞聖人ご往生のちょうど50年前にあたる1212（建暦２）年１月25日に入滅されました。そのため、浄土宗の大遠忌法要（「元祖法然上人大遠忌」）は、浄土真宗の大遠忌法要と同じ年に勤まっています（今年は法然聖人800回大遠忌でもあります）。記録によると、1711（宝永11）年の法然聖人500回遠忌の頃に、現在に至る大遠忌の次第が整ったようです。

役行者一千年御忌

江戸時代に入ると、各宗派は競うように宗祖・開祖の遠忌法要をお勤めするようになります。たとえば、聖護院門跡を本山とする修験道本山派では、1699（元禄12）年に「役行者一千年御忌」を箕面山瀧安寺（大阪府箕面市）で行いました。ちょうど世間では「行者信仰」ブームもあり、当日の記録は「前代未聞の群衆にて候」「山内は人充満し通路なりがたく候」とその賑やかな様子を伝えています。

遠忌の時代

このように、教団仏教の時代といわれた江戸期は、多くの宗派で遠忌法要が盛大に迎えられました。全国から門信徒が集まり宗祖・開祖を偲ぶ50年（宗派によっては100年）に一度の遠忌法要は、教団仏教を象徴する行事といえるでしょう。その意味で、江戸時代の仏教は「遠忌の時代」ともいえるのかもしれません。



「法然上人大遠忌風景」（知恩院所蔵）

古文書にみる大遠忌

写真や映像など記録手段の豊富な今と違って、江戸時代の大遠忌は主に文字で記録され、次の大遠忌へ大切に引き継がれました。今回は、250年前の1761（宝暦11）年に勤まった500回大遠忌法要に関する古文書から、雅楽儀礼の様子を見てみましょう。

①「舞楽演目ノ覚」（部分）



舞楽の演目

①は、舞楽の演目リストです。上段が演目で下段が舞人の名前になります。江戸時代は御所（京都）・南都（奈良）・天王寺（大坂）の「三方楽所」が演舞を行いました。雅楽演奏家として有名な東儀秀樹さんと同じ「東儀」姓がみえます。楽人（楽師）たちは東儀や多などの家に分かれ、代々その技能を継承してきました。

法要で舞われた舞楽は、例えば②のようなものです。色鮮やかな異国風の衣装が目を引くように、舞楽は大陸や朝鮮半島から伝わってきました。その歴史は古く、752（天平勝宝４）年の東大寺大仏開眼供養会でも舞われました。大遠忌では、1661（寛文元）年の400回大遠忌から雅楽が演奏され、450回大遠忌の頃からは舞楽も加わりました。現在の本願寺では、龍谷会の記念行事などで演舞されています。



②迦陵頻（四天王寺聖霊会）

楽器の種類

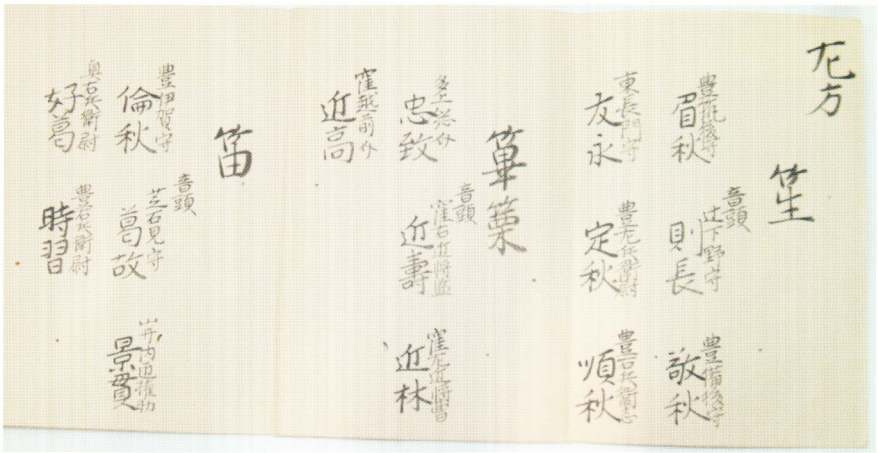
③は、演奏に際して担当する楽器のリストです。右上に「左方」とみえますが、この他に「右方」があります。左方（唐楽）と右方（高麗楽）では担当する楽器が異なっていました。ここにみえる笙（鳳笙）や笛（横笛）は、東大寺正倉院の宝物にも収蔵されており、その独特の音色は長い歴史を感じさせます。

芸能と仏教儀礼

昔の踊りや楽器というと、私たちは伝統芸能・文化として扱い、仏教とは切り離して考えがちですが、雅楽や舞楽は余興ではなく法要の一部として行われていました。仏教儀礼は読経や祈祷だけでなく、様々な要素で構成されていたことがわかります。昨今は、寺院を舞台とするコンサートやイベントが盛んですが、仏さまへの悦びの表現という芸能本来の意味も忘れてはいけないように思います。

（研究員　大田壮一郎）

③「舞楽左右楽人役付ノ覚」（部分）



参考文献・資料
- 「大遠忌の歩みとその時代」（『宗報』2010年５月号、以降連載）
- 『華頂誌要』知恩院御忌法務局
- 『箕面市史』史料編、箕面市役所
- ①「舞楽演目ノ覚」（本願寺史料研究所所蔵）
- ②本願寺仏教音楽・儀礼研究所所蔵写真
- ③「舞楽左右楽人役付ノ覚」（本願寺史料研究所所蔵）

行ってきました“親鸞さまの道”

2010（平成22）年10月６日、当研究所主催「一緒に歩こう“親鸞さまの道”」ツアーを実施しました。９月８日（第１回）はあいにく台風に見舞われ中止となりましたが、今回は好天に恵まれ、初秋の空気を感じながら参加者の皆さんとご旧蹟を歩きました。ツアー当日の様子について写真を交えながらレポートします。

今回のコース

①本願寺 → ②赤山禅寺 → ③きらら坂 → ④北山別院 → ⑤六角堂 → ⑥本願寺



缶バッチ

ツアーの様子

行　程

▶ 08:30
集合・出発式

▶ 09:20
聞法会館出発



聞法会館に集合し出発式です。音楽礼拝をお勤めした後、佐々木惠精センター所長・小野功龍研究所長よりご挨拶をいただきました。参加者の皆さんには、資料と参加記念の缶バッチが配られました。総勢24名でバスに乗り込み、最初の訪問地赤山禅院を目指します。

▶ 10:00
赤山禅院

比叡山麓の赤山禅院は、市中の喧騒を離れた閑静な住宅街にあります。瓦屋根の上に乗っているお猿さんの置物に皆さん驚かれましたが、この場所は都の「鬼門」の方角に当たるため、鬼除けに置かれているものです。伝承によれば修行時代の聖人が、ここで“玉日姫”に出逢われたとのことです。ここから修学院離宮の前を通り、きらら坂へ向かいます。



▶ 10:40
きらら坂



きらら坂は、都から比叡山へ至る山道の中では勾配のゆるやかな方ですが、所々に急坂があります。参加者の皆さんは、岩肌が迫る険しく狭い山道の入り口にたたずんで、百日参籠に往復された聖人のご苦労に思いを馳せていました。また、「親鸞聖人ご旧蹟」の石碑が立つ川辺で、布教使の武山晃隆師からこの場にちなんだご法話をいただきました。

▶ 11:50
北山別院



きらら坂から北山別院までの道は、平坦ですがかなり距離があります。少し暑いくらいの陽気でしたので、曼殊院門跡の門前やきらら漬けの店「穂之出」で小休止を取りながら歩きました。北山別院では本堂にお参りして讃仏偈をお勤めし、境内の聖水井や清朝渡来の珍しい梵鐘を見学しました。ここから再びバスに乗車し六角堂を目指します。

▶ 13:00
昼食（銀ゆば）

▶ 13:50
六角堂

最後の訪問地は六角堂。今は京都のオフィス街の真ん中ですが、聖人が百日参籠に通われていた頃も、訪れる人の絶えない賑やかな場所だったようです。高層ビルとお堂が重なる風景も、緑に囲まれたお寺とはまた違った風情があるものです。この後、聞法会館に戻り解散となりました。参加者の皆さんはお疲れの様子もなく、元気にお別れしました。



▶ 14:30
聞法会館到着

参加者の声 ― 当日のアンケートから ―

・聖人の人生を味わうことが出来て、うれしく思いました。（70代）
・今度は、きらら坂を比叡山から降りてみたいです。（60代・女性）
・聖人の青年期に思いを巡らせ、自力から他力へ転換されるご決意を考えました。（60代・女性）
・五木寛之『親鸞』を読んでいたので、とても興味深く感慨もひとしおでした。（70代・女性）
・参加者同士でもお話しすることができ、「お同行」という言葉を実感できた。（60代・女性）
・ご旧蹟の解説者と法話担当の布教使が同行していたのはありがたい。（70代・男性ほか多数）
・次回も参加したいので案内がほしい。（多数）
・他のコースもまわりたい。（60代・男性ほか多数）





ツアーを終えて

初回ということで何かと心配もありましたが、皆様のご協力を得て無事に終えることができました。また、定員を超える申し込みがあり、遠く九州からの参加もありました。現場を歩き、儀礼を体験する。それが新たな気持ちでみ教えをいただくことにつながれば、との想いを胸に、今後も色々なコースを企画し、皆さんと歩いて行きたいと思います。　（研究員　大田壮一郎）

追悼　浅井成海先生

センター所長だよりを執筆して頂いておりました、教学伝道研究センター前所長 浅井成海先生が2010（平成22）年6月6日にご遷化されて早や半年。お世話になりました先生を偲んで、先生とご縁の深い方々に追悼文を寄稿して頂きました。

真の教育者

小野功龍

（本願寺仏教音楽・儀礼研究所 所長）

浅井成海先生の御往生からもう半年余りの月日がたちました。研究所のあります本願寺第三庁舎の前にたたずみますと、今も堀川通りの彼方から御聖教や書物の一杯詰まった大きな鞄を肩に掛けられ、やや体を斜めに傾けてゆっくりと歩いてこられる先生のお姿を彷彿として思い出します。

嘗て2003（平成15）年12月、私は龍谷大学宗教部より宗教部特別講座の講師としてお招きをいただき、深草学舎の顕真館で「雅楽」についてのレクチャーデモンストレーションをさせていただきました。その折、壇上より照明の落とされたほの暗い客席の中央の辺りに、若い学生さん達に混じって聴講なさっている浅井先生の御姿を発見しました。浅井先生といえば教学の泰斗のお一人とばかり思っておりました私にとって、その御姿に先生の更に幅広い教養を求めようとなさる真摯にして謙虚な学究的態度を強くうかがわせていただきました。

明けて2004年、浅井先生は長年にわたって奉職された龍谷大学を定年で御退職になり、その退職祝賀会が京都東急ホテルにて催されることになりました。その際、先生の御希望で、舞楽の演奏依頼が私の主宰します天王寺楽所雅亮会にございました。その舞楽の選曲については、積年にわたる先生の研究者として、また教育者としての業績を祝福するものとして「萬歳楽」という舞を演奏させていただくことになりました。この舞は、唐伝の曲といわれ、古来慶祝の折々に演奏される舞として今日に伝わってきたものです。当日、壇上で奥様と共に多くの先生方や御弟子さん方に囲まれて御鑑賞くださっていた先生の表情を今もしっかりと覚えております。



故 浅井成海 前センター所長

その後、教学伝道研究センターのセンター長に就任され、私は再び先生にお会いする御縁をいただきました。これからは先生と一層お近づきになり、様々なお話や御教示を得べく思っておりましたのに、余りにも短い任期でございました。今は先生との数々の思い出を胸に秘め、先生が再び御浄土よりお還りいただき、われわれを御照覧賜ることを願うのみであります。

ご法義のために

直林不退

（本願寺仏教音楽・儀礼研究所 委託研究員）

浅井成海先生には、2007（平成19）年春、築地本願寺での「節談説教布教大会」開催準備の折、新たに設立された節談説教研究会の初代会長にご就任いただいて以来、筆舌につくしがたい尊いお導きを賜った。特に先生が長年かかわってこられた基幹運動の経験から、節談という情念に訴える伝統的布教法がややもすれば陥りやすい問題点を、あらゆる場

面で懇切丁寧にお示しいただいたのは、何よりも有難いご縁であった。

2008（平成20）年７月８日に行われた「本願寺文化シンポジウム・節談が伝える御法義」（本願寺仏教音楽・儀礼研究所主催）では、第３部のパネルディスカッションにご参加いただき、教学的視点より貴重なご発言を頂戴した。その折、近年ご法座の場面で「受け念仏」の声が消えてしまっている状況にふれて、本当に軽い気持ちで「先生にとっての称名念仏とは」とついおたずね申しあげてしまったのである。いつもは温和な表情の先生が、その時ばかりはお顔をこわばらせ、ご自身の学問体系の中でのお念仏の位置づけを真剣にお話しいただいたのだ。私は司会として大変なことをお伺いしてしまったと冷汗一杯で、後刻その旨を率直にお詫びすると、「いやいやいいんですよ」といつもの笑顔で、私の労をねぎらってくださった。

筆まめな先生からの最後のお手紙は、５月７日敦賀局の消印のあるお葉書である。後から考えるとこの時もうご体調を崩しておられたに違いない。しかし、ご自分の病気には一切ふれず、逆に私の家族の健康を気づかっていただいた。「浅井先生らしい」と涙を禁じえない。そのお便りは、「ご法義のために尽くされ、本当にありがたいことです。私も微力をつくしていきたいと思います」との一文で結ばれている。今は、このお言葉を先生の遺言と受けとめさせていただきたい。



築地別院にて

写真提供：本願寺出版社　　背景：御影堂内陣障壁画（部分）

生かされて生き抜く

武山晃隆
（本願寺仏教音楽・儀礼研究所 委託研究員）

「悲しみ、苦悩のない人なんておりません。誰もが経験する、人生の課題を乗り越えることが、浄土真宗の救いです」。浅井先生から何度も繰り返し聞かせていただいた、心に刻まれた言葉です。先生には、龍谷大学入学以来、長年にわたりご指導いただいたことです。学生の時、心配事があったらいつでも相談しておいでと声をかけてくださり、悩みを親身に聞いて下さいました。「苦しいなぁ辛いなぁ、しかし、お念仏と一緒に、乗り越えていこうよ」。温和な表情と声に、心がほぐれたと同時に、どんなに状況が厳しくとも、お念仏申し乗り越えていこうよとの言葉を忘れることができません。

近年では毎年、岩国での勉強会が、私にとってかけがえのないご縁となりました。先生のお荷物を預かると、お聖教や資料が詰まった鞄の重さに、誰もが驚きました。時間があくと、録音された先生の講義を、ノートを広げ、聞きなおしておられます。多忙にもかかわらず、必ず新しいレジメを用意してくださいました。講義が終わると、「ありがとう、ありがとう」とおっしゃる姿など、あれこれが浮かび上がります。先生のご往生なさった六日後、ご自坊にお伺いした折、坊守様より、ゆっくりされるはずのご自宅においても、「教え子に、みなさんに育てていただいているのだから、手を抜くわけにはいかない」と、夜遅くまで研鑽なさった姿を聞き、涙がとめどなく流れたのでありました。

2010（平成22）年４月13日、勉強会の際に戴いた著書の背表紙に、先生の力強い筆跡の「生かされて生き抜く」という言葉を見ては、何度もお礼させていただいております。その勉強会の冒頭は、「護られるということは、乗り越え、転ぜられるということです。病気をしても、仕事がうまくいかなくても、そこへ深い意味を見出して、それが決してマイナスにならないという内容が転ということです」と始まり、お念仏の教えを聞き続けよと、先生自ら噛み締めながら、講義が続きます。

念仏に生き抜かれた姿は、私たちにどんな苦難も力強く乗り越える道をご教示し続けてくださることであります。

浅井先生、長きにわたり
ご指導を頂き有難うございました。

特集

葬儀“あれこれ”

中陰の「三月がかり」を避ける習慣

人類の歴史上、もっとも古い儀礼といわれる葬儀。その長い過程で、徐々に儀礼に込められた意味が忘れられ、単なる習慣として行なわれていることも少なくありません。また反対に、宗教的理由のないものが慣習として横行する昨今。今いちど、葬儀について考えてみませんか。

Ⅰ．儀礼の意味合い、解明の難しさ

『宗報』2010年８月号「シリーズ 葬送儀礼の問題を考える」では、葬送の現場で起こるさまざまな問題の背景に、現在の葬送儀礼には、その成立過程に真宗以前さらには仏教伝来以前から継承している要素があり、それらと真宗儀礼が一体化して成立したものであることを指摘しています。

また、そのような複雑な成り立ちを持つ葬送儀礼を考える際の論点として、①真宗教義によって、後付けの解釈が可能な要素、②明らかに、真宗教義に反する要素、③真宗教義では説明ができない要素の３つがあり、特に③の扱いが大きな課題であると提起しています。また、儀礼を生み出し、そして変化させるものとして、「教義」「教団」「信者の思い」が重要な役割を果たしています。

今日、私たちが葬儀の現場でとりおこなっている数多くの儀礼は、実に幅広い時代と地域の中で、その３つの要素が複雑にからみあいながら成立したものです。そして、その中には儀礼を生み出した背景すら忘れられてしまい、全く別の意味づけがなされているものも少なくありません。

葬送は各地の地域共同体によって担われてきた歴史があり、地域独自の様式と多様な意味づけが行われています。従って、「なぜこの場面でこの儀礼なのか」「この儀礼にはどんな意味があるのか」という問いに答えていくには、こうした儀礼の成立と変化のプロセスを一つ一つ丁寧に解き明かす必要があり、それは容易ではありません。そして、もし仮に一つの儀礼の意味あいについて、学問的に説明がついたとしても、葬送の現場における遺族の思いに対し、その合理的解釈がはたしてどれほど共感を得られるのでしょうか。この点について、今回は中陰の「三月がかり」を避ける習慣を例にお話ししたいと思います。

Ⅱ．語呂あわせに翻弄される人々

現在の日本では、中陰（四十九日）の期間が３ヶ月にわたる場合、翌月末に満中陰法要をつとめ、中陰を短縮する習慣がかなり広まっています。門信徒から「中陰の三月がかりを避けたい」との申し出があった場合、浄土真宗の僧侶は「それは迷信ですから気にされないように」とか「始終苦が身につく（四十九が三に月）という単なる語呂合わせですから、特にこだわらない方がよいのでは」と、正規の日程で中陰をお勤めするように勧めるケースが多いでしょう。

しかし、この習慣が全国的に広まっている現実を考えますと、どうやらこの説明では、十分な説得材料となっていないと言えましょう。ましてや、「これ以上苦しみが重なってほしくない」という遺族の心情を汲みますとなおさらです。

Ⅲ．中陰の「三月がかり」を避ける宮中の習慣

室町時代の貴族の日記に、すでに中陰の「三月がかり」を避けたという記録が残っています。いつから始まったか定かではありませんが、とても古い習慣と推察できます。しかも、その内容から、この習慣は宮中発祥ということも分かりました。

官僚でもある当時の貴族は、縁者の中陰の間、宮中の祭事への出席を遠慮していました。３ヶ月にわたり中陰を勤めることは、宮中で毎月はじめや月末に行なわれる行事を２回続けて欠勤することを意味します。服喪による公務停滞を最小限に止めたい、という官僚たちの事情が働いたのでしょう。いつの頃からか宮中では、

仏教の四十九日の儀礼と関係なく、中陰の「三月がかり」を避ける習慣ができたのです。

そして、この中陰儀礼の短縮が広まるにつれ、元来の仏教的な意味が忘れられてしまい、「始終苦が身につく」という語呂合わせが生れたのでしょう。まさにこれは、非仏教的見地から後づけした典型的な例ではないでしょうか。

Ⅳ. 合理的説明から遺族の心情へ寄り添う姿勢へ

ところで、肉親をなくした直後の近親者に対し、こうした儀礼の成立と変遷の合理的説明は、どのように受け取られるのでしょうか。私の拙い経験では、論法が理路整然として説得力が強ければ強いほど、逆に遺族の方々は「思いを受けとめてもらえない」ストレスと、ひいては僧侶への距離を感じるにちがいありません。

やはり遺族の心情に寄り添うためには、「わかった、理解した」という次元ではなく、心の底からともに感じあえる世界がもとめられます。そのためには、遺族の思いを徹底的に聞かせていただくことや、何よりも日頃の信頼関係が必要なのはいうまでもありません。そのうえで、逆に「始終苦が身につく」という後付けを手がかりにして、「仏教は苦しみから逃れるのではなく、苦悩の中で真実にめざめる教えです。私たちも身近な人の死にであうことによって、改めて気づかされたことがあったと思います。今まで他人事として避けてきた死、それを身近に経験した時、私たちは大切なことにめざめさせられるのでは」と語りかけるのも、一つの共感への道ではないでしょうか。

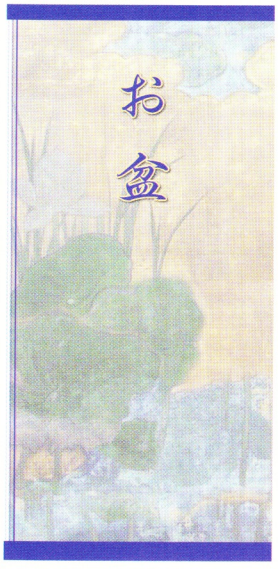
葬送の現場で行われている多様な儀礼の意味あいに関しては、単にその成立と変遷を客観的に解明するだけでなく、それを遺族の心情と何よりも私自身の問題として、どのように受け止めていくかが肝要であるといえましょう。

（委託研究員　直林不退）

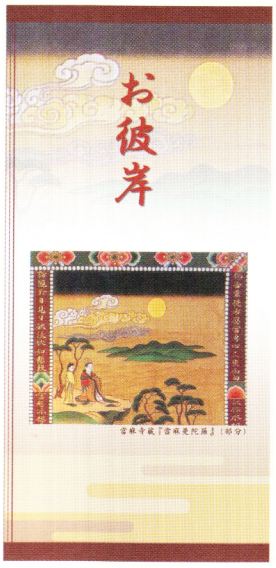
研究活動の紹介 ―― 真宗儀礼論研究より リーフレット配信のお知らせ

リーフレット『除夜会／元旦会』をお届けしています。当研究所HP（奥付のアドレス参照）からPDFファイルをダウンロード可能です。また、本年は「大遠忌」特集のリーフレットを３回にわたり掲載の予定です。本願寺に参拝される方など、ぜひダウンロードしてお配りください。詳細は、当研究所HPまたは教学伝道研究センター事務局まで（奥付参照）。

歴史と功徳について



歴史とお墓まいりについて



歴史と新年の迎え方



表紙写真の解説——蕎麦喰い木像

山の上の御像

蕎麦喰い木像——このユニークな名前の御像は、比叡山延暦寺山内の大乗院におわします。なぜ「蕎麦喰い」なのかというと、修行僧が集まって食事が振る舞われた際、六角堂に百日参籠へ通われ留守だった親鸞聖人の身代わりに、この御像が蕎麦を召し上がり、他の僧侶たちに怪しまれなかったという話に由来するようです。

いつの頃から御像が大乗院に安置されたのか定かではありませんが、大乗院では天台宗の法要と真宗の報恩講が毎年お勤めされています。

御像のおわします大乗院へは、ケーブル延暦寺駅から片道30分ほどの山道を徒歩でゆく他なく、お参りを断念される方もおられると聞きます。しかし、このたびの大遠忌にあわせて、御像が東塔に御遷座し大講堂にてお参りできることになりました（2011年3月～11月まで）。親鸞聖人750回大遠忌を御縁に比叡山へお参りし、若き日の聖人のご苦労を偲ぶのもよいでしょう。



大乗院



法住寺

山の下の御像

本願寺からほど近い東山の法住寺（天台宗）にも、聖人御自作と伝える「蕎麦喰い木像」がおわします。かつて女人禁制であった比叡山では、女性が御像に礼拝することが叶わなかったため、江戸時代に御像を山麓に降ろし、真宗佛光寺派の寺院に安置されました。やがて明治になり、現在の法住寺（当時は大興徳院）に遷されました。御像の隣には、同じく聖人御手作と伝わる阿弥陀如来像（「なた作の如来像」）も安置されています。

当寺の御本尊は、後白河法皇が信仰した「身代わり不動明王像」です。同じく身代わりとなった御像とのご縁を感じますね。こちらの御像も大遠忌に合わせて特別公開が行われています（2011年11月30日まで）。法住寺は観光客で賑わう三十三間堂のすぐ北隣です。御寺の方の話では、今年はすでに門信徒方の参拝予約がたくさん入っているとのことでした。御像へ参拝の際には、御本尊にも手を合わせ、静かにお参りさせていただきましょう。

仏教儀礼

本願寺仏教音楽・儀礼研究所 ニューズレター 第13号

発行日：2011（平成23）年1月
編　集：本願寺仏教音楽・儀礼研究所
発行者：浄土真宗本願寺派 教学伝道研究センター　所長・佐々木惠精
〒600-8349 京都市下京区西中筋通花屋町下ル堺町92番地　本願寺第3庁舎内
Tel.：075-371-9244　Fax.：075-371-5761
http://crs.hongwanji.or.jp/ongi/
頒　価：無料
協力・写真提供：真宗大谷派専称寺、吉田カメラ、Wa☆Daフォトギャラリー（和田義男）、総本山知恩院、本願寺史料研究所、本願寺出版社（掲載順）